

第二期作戦

塘支隊は余家埠付近に態勢を整え、二月二十一日薄暮同地出發、暗黒の中を田圃を歩き水流を渡り、堤防を上り下りしつつ北門街、満部頭付近を東北に向かい前進。二十二日黎明、万福寺付近で突然、角形大堡壘より迫撃砲の乱射を受ける。築場大隊は保皇南方水田から攻撃を開始したが、敵の瞰制下にあるため、第九中隊を率い敵前を斜行して堤防方面に移り、手榴弾戦を繰り返した末、〇九〇〇頃同堡壘を占領す。

大隊は引続き北口街の敵陣地を撃破し東進、同夜陳家祠堡壘を占領し、捕虜八〇名のほか迫撃砲、重・軽機多数を鹵獲、さらに東進。この間、支隊主力方面において二十三日までに満頭、李家廟、三聖巷の各堡壘を攻略した。

支隊はさらに南側地区を、主力は府場、謝仁口に沿う地区を攻撃。築場大隊は二十三日施家漢突入、二十四日謝仁口を占領し峯口方面に対する包圍態勢を完整した。軍は峯口を占領し、第四十師団は二十五日、戴市東方約二キロ付近で王師長を捕らえた。作戦開始以

来二月二十六日までに判明した戦果は、遺棄死体二二〇〇、俘虜三七五〇、迫撃砲三〇、重機一六、その他を鹵獲した。第三次作戦後、支隊は二月二十八日朝、府場付近から反転し、三月四日監利西側地区に集結し、次期作戦を準備した。

以上が吉田氏が初めて参加した江北殲滅作戦における第三師団関係の概要である。

わたしが一番

きれいだつたとき

山口県 土網 輝 男

一、宇品港での姉との別離

広島在住の姉・邦子は入隊以来、毎日曜日の面会時間には必ず不自由な配給食品の中から作った「おはぎ」の差し入れをして慰め励ましてくれた。しかし郷土部隊在留もわずかの期間で、外地出陣の命で部隊は宇品港に向かう。

もうもうと埃を立てて完全装備の行進をする隊列を、和服の姉は路面電車を乗り継ぎ乗り継ぎつつ、部隊を追い越し、追い越しながら手を振り、声を上げ付いて来る。互いにそれが最後の別れかもしれない。悲痛な思いを声にも出せないまま軍靴の音で応えて、無事を祈りつつ別れた。別離、死を決意して戦場に赴く弟を慰めようと見送ってくれた姉は、終戦前八月六日に被爆して倒れ、死して当然の弟は五十年も生き延びてここにある。

二、価値観の倒錯

中支藤部隊の当陽における師団通信隊の候補生教育は熾烈さの重なりであったが、いつしか一応の前線指揮者の卵として態様もやや整いつつあった。野外演習のある日、先任として豊川教官に命令受領のため「○候補生、命令受領にまいりました」と直立不動で待機の瞬間、馬上の教官が手綱の操作を誤り、突如として馬がいなくなきと共に馬蹄を宙に上げて蹴りかかって来た。そのままの姿勢で居続けていたとしたら肋骨が顎の骨を粉砕して重傷はまぬがれぬところ。本能的に

とっさの気転で手に持った銃で、ハッシと蹴りかかって来る馬蹄を、受け止めて難をのがれることをえたのだ。血の色を失った教官は、やおら馬から降り立つと「おそれ多くも、陛下から賜った銃を盾にして身を防いだ、その不屈きは万死に値する」と豪語して抜刀の上白刀をかざして切り降ろさんとした。

部隊全員が息を飲み注視する中で、鉄誅を加えるというのだ。一瞬の後、教官の手が思い止まったので事なくしてすんだものだが、このことだけは戦時の真っ只中とはいえ、命に対する条理の倒錯に際限のない噴怒を今もって禁じ得ない。

三、N君の脱走

某大の文学部卒のN君は、全く軍隊には不向きな性格であった。のろい動作、言語の不明瞭、内向で女性的な気合のなさ等々で、教育隊のなかで常に最後尾の存在で、気の毒なほど古参兵のいじめの目標にされていた。軍隊は嫌だ、不向きだと口癖のように漏らしていたようだ。

ある夜その彼の姿が消えていった。兵営の外はすべ

て敵地である。その後彼の姿はついぞだれも見ること
はできず、話題にすることすら許されなかったが、重
なるつらさに耐え切れず脱走したのではないかと囁か
れていた。

彼こそは帰営しても命の保証はないし、敵中に迷い
込んでも救いがあつたかどうか、振り返る余裕のない
軍務の中、時折彼の運命を思い起こしながら殺伐たる
兵舎の眠りにつくことがあつた。

中支に向かう輸送船が支那海にさしかかったばかり
の敵情の極めて悪い海路の船中で、学徒兵それぞれ望
郷の念止む難き心情のとき、突如、船内スピーカーで、
「対米和睦交渉が成立した、軍は速やかに戦線を撤収
すべし」の命令下達の放送が流れた。みんな一様に我
が耳を疑つて聞き入ったが、伝達が相違なきものだと
確認ができるや、船内のあちこちから、どよめきが起
こり、やがて一つの歓声となつて船内に轟き渡つた。

「平和になつた。みんな帰れる」の喜びが若者たち
の頬を紅潮させていった。しかし次の瞬間、「ただ今
の放送はデマ放送であつた。大御心の期待を受けた諸

君学徒兵の戦意の覚悟を試した所だ、残念ながら諸君
の本心は見届けることができた。ただ今から入魂の鉄
槌を加えるから覚悟を決めるように」と。

二列に向い合つての対抗ピントの無制限の懲罰が続
き、何人かが失神した。N君はおそらくこの時も失神
組に入つて真つ暗な心で泣いていたのではないだろう
か。

四、運命の岐路

中支、湖北省当陽の師団通信は幹侯教育隊から閩東
軍第五四九部隊教育隊転属の命を受け、三十余名が約
一週間余をかけて敵情の悪い状況を潜つて、目的地の
奉天に着任した。

当陽のバラック兵舎と異なり奉天市内に堂々たる鉄
骨四階建ての兵舎に移住することになった。が早速に
寒さとの戦いである。耐寒温度マイナス四〇度。眉毛、
髭が凍り、大便所が氷柱の林となるなかでの訓練も決
して生易しいものではなかった。しかし物資は遥かに
中支の前任地よりは豊富であり、演習の折にも街々の
内地人を見ることは何かホツとしたゆとりを感じるも

のがあった。

奉天では、すぐ上の姉・静子が軍属の妻として長春に居住していることを知る。休暇の折の再会を唯一の楽しみにしていたが、ある夜教官から呼び出され姉の急死の報を受け、余りにもはかない別れに一人悲しみに沈む幾夜を過ごした。

寒気にも訓練にもやや慣れて来たころ、突如として命令あり、「君たちは内地の戦況が急迫し、本土決戦要員として祖国に帰って尊い盾となつて欲しい。戦運傾く場合は陛下を無疵の我が関東軍が奉天にお迎えすることになる」という主旨である。命を受けた者は祖国に帰れる喜びを秘めながら、任務は今一度豊橋の教育隊に転属し、対ソ戦より対米作戦の訓練を受けることとなる。

内地のほとんどの都市部はその面影もなく空爆を受け、赤茶けた土色の廃虚に変わっていた。豊橋で四、五カ月の特訓を終え、見習士官としていよいよ本務につくわけであるが、原則として郷土部隊に配属ということが見通されていた。当時珍しくまだ被爆のない広

島帰還は憧れであった。宇品港まで見送ってくれた姉とも会えるのだと楽しみにしていた。ところが悲しいかな、五名だけが久留米配属の命を受け愕然としてしまった。

広島駅頭で同情の目で見送られた五名はジダンダ踏んで人事の教官を恨んだ。しかし運命は皮肉にも広島に欣喜して配属された二十数名の同期生は、三原市の母の命日に墓参していた上栗君を一人残して全員原爆に被爆し、散華して行つた。

五、本務就任そして終戦、復員

久留米補充隊では暗れの見習士官として、営外居住という思わぬ厚遇を受け、気合いっぱい勤務に就いたが、何せ初年兵が十八歳前後の童顔を残した若者と三十歳の中程の中年の召集兵である。装備も竹の短剣、銃も水筒も全員に行き渡らない状況下では、訓練も気合も拍子抜けの感で取り付くしまもない。しかしかななる国難にも耐え、祖国存亡にかけて闘い抜く決意は旺盛なるものがあつた。

しかし八月六日の広島原爆、続いて長崎の被災等

が、ただならぬ戦況として伝わって来たころ、だれも予期しなかつた終戦の詔勅に接し、八月十五日の空は様相一変して塗り換えられ、新しい時代の幕開けとなった。

除隊、復員のざわめきに部隊は統制がやつとの混乱状態に迫られ、情報が乱れ飛び、これがかつての軍律を誇った日本帝国軍隊のなれの果てかと思われる明け暮れが続いた。例えば訓練に厳しかった大和魂のかたまりのような古参の曹長が、トラックに物資を満載して持ち出すかと思うと、片や若気に逸る将校が決死隊を募って命の限り聖戦を全うすると狂つたように歓声を上げたりした。

日々混乱の増す中、やつとの思いで補充隊を後に復員の貨物車にゆられて柳井駅頭に立つたとき、改めて昔の面影のままの町角の中でやつと命永らえ帰郷した実感を持つことができた。

それにしても暗闇の貨車の中で別れた広島に帰って行く立教大の野球部で鳴らした戦友中林君は、家族が東京から広島に疎開、その上の被爆の様子なので、気

の重い復員であつたことを思うと慰めの言葉もない。

六、回顧

毎日が死と向かい合い、殺し合いに勝ち残るための訓練は確かに一面において人間錬成のこの上ない修練の場であつたように思われる。生き残るための苦汁とそれを乗り越えたときの自負、嵐のような私的制裁、問答無用の完全統制、抽象より具体、理論より実証、起床から就寝まで一刻の自由もない集団訓練。その貴重な体験は、その後の人生においていかなる困難の前にも兵役が与えてくれた苦しさに比べては克服のハドメになつて今日があるような気がする。振り返つてみると幾度となく運命的に危機を免れて救われた命運だと思ふ。

もし関東軍に残留していたら極寒のソ連抑留の試練が待つていただろうに。また最後の任地が広島であつたら全滅の悲運が……あの原爆の日、母の墓参で一人助かつた上栗君は何千という戦友、一般市民の遺骸の処理に明け暮れるなかで「自分の生涯は広島島の戦後処理に捧げて行く」ことを決意し、戦争孤児收容所を開

設した。

そしてまた、半年か一年入隊が早いか、あるいは終戦が遅れても、いずれの場合も第一線用消耗品の幹候将校であつて見れば、九死に一生を得るのもおぼつかなかつたのではなからうかと思ひ巡らすと、貴重な一生を恵まれたという祈りのようなものが日常のどこかに見え隠れしているように感じられてならない。

花の青春を異国の地、海、空で散らせ逝つた数々の若者たち、そして運命の導きで一命を取り止めた同世代の者たちと、計り知れない命運の隔たりは永遠に埋めようもない。

しかし、戦後五十年、生あるものも数少なくやがては同じく土に還つて行く年輪になつて来たことを思えば、運命の隔たりも少なく感じられてきてならない。同じゴールに向かつて遠回りしただけのものかもしれない。

◇むすび◇

わたしが一番きれいだったとき

街々はがらがら崩れていった

とんでもないとところから

青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき

だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかつた

男たちは拳手の礼しか知らなくて

きれいな眼差しだけを残し皆発つていった

わたしが一番きれいだったとき

わたしの国は戦争で負けた

そんな馬鹿なことつてあるものか

ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた

わたしが一番きれいだったとき

わたしはとてふしあわせ

わたしはとてみんなかん

私はめつぼうさびしかった

だから決めた。できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのようにね

この詩は戦争と空襲とそれに続く敗戦後の混乱の中に青春を過ごした女性作家、茨木のり子が自分の体験に即して平和への願いを歌った詩である。

戦争は若者の男性だけのものではなかった。非戦闘員の母も妻も娘も老いた父も、そして子供たちも皆闘つて敗れた。そして命と共に数知れない家庭が町が歴史が跡かたもなく焼けただれていった。戦争の落とした暗い影は永遠に消すことはできない。私の今後の生き様もルオー爺さんのように、年ごとにめつきり少なくなつて来つつある五歳、十歳、ひと回り年上の憧れの爺さんを見付けて、さびしかった人生を長生きしたいものだと思う。

山西軍の悲劇 終戦後も戦う

岐阜県 大山盛男

私の軍歴は次のようである。

昭和十八年十二月一日、現役兵として大阪歩兵第八連隊へ仮入営。十二月十四日、北支河南省柘城たくじょう県騎兵第四旅団、第二十五連隊へ入営。

昭和十九年二月、第五十九師団司令部へ転属。同年三月歩兵第十四旅団、独立歩兵第二百四十六大隊編制完結。北支山西省南部の警備。

昭和二十一年三月、中華民国第二野戦軍総司令官閻錫山に留用される。

昭和二十三年五月留用解除。同年五月末山東省大沽港より引揚船「日本丸」にて佐世保上陸。

ここに留用という言葉があるが、日本軍武器の争奪をめぐる国共戦争の中で、戦後五十年に至る今日まで、